

## なぜ「授業研究」は必要なのか

大阪教育大学・木原俊行

### 1. 校内研修の支柱としての「授業研究」

授業研究という言葉の口にする人は少なくない。けれども、その対象には、多様性が確認される。小中学校等で教師たちが同僚に対して授業を公開する場面を意味することもあれば、大学に籍を置く研究者がカメラを小中学校の教室に持ち込んで授業の様子を記録し、独自の視点で、それを分析する場合を指すこともある。授業のプラン、例えば、指導案の作成に時間を割く場合もあるし、授業評価にエネルギーを注ぐ場合もある。

それぞれの「授業研究」には、そのねらいがあり、それゆえに、ねらいに即した基本スタイルがあり、そして特長と課題がある。つまり、「なぜ『授業研究』は必要なのか」という問いに対する答えは、それが営まれるシーンによって変わる。

紙幅の都合上、また本特集の趣旨を踏まえ、本小論では、「校内研修の支柱としての『授業研究』」について、その意義や要件を論ずることとする。これは、「学校」で繰り返されている、その学校の教師たちに「共通する課題の解決に向けて」（学校の研究主題等に即して）取り組まれる、授業の「ケーススタディ」である。そして、それは、授業理論の構築を目指す科学的な営みというよりも、その学校に属する教師たちの授業力量の形成を意図した研鑽の機会であり、それを目指す同志による共同体構築の舞台である。<sup>(1) (2)</sup>

### 2. 教職の特性から

なぜ、教師たちは、同僚と協力して、授業に関する研究的活動に励まねばならないのか。授業研究の必然性は、昔も今も、また洋の東西を問わず、教職の特性によって生ずる。それは、次のものに代表される。

### **(1) 裁量が大きい**

授業づくりは、とても創造的な営みだ。授業の目標や内容、あるいは活動の計画、つまり授業デザインには、かなりの裁量が認められている。周知のように、わが国の学校における教育活動は、学習指導要領にもとづいて進められる。これには、法的拘束力があるからだ。けれども、その叙述は、あまり具体的ではない。目標や内容、指導の留意点等が概説されているだけである。

それゆえ、教師たちは、担当する子どもたちの学力等を高めるために、学習過程や準備物等を具体的に検討せざるをえない。教科書に準拠した指導書などが参考にはなろうが、それらが目の前の子どもたちにフィットするとは限らないから、そのまま実施するには無理がある。

自らが指導する子どもたちにどのようなデザインの授業を提供すべきか。誰かが正解を教えてくれるわけではないし、どこかにマニュアルがあるわけでもない。教師自身が、授業を対象化し、そのあり方を多面的かつ具体的に検討して、すなわち授業研究を繰り返して、ベターな方策を探るしかない。

### **(2) 即興が尊ばれる**

皮肉なことに、どんなに授業の準備に熱を込めても、子どもは、教師の思惑どおりには学ばない。いや、彼らが教師の予想を超えた姿に至ることは、むしろ奨励されて然るべきことである。

したがって、教師は、授業中に、子どもの反応をとらえ、即興で授業デザインを再構築しなければならない。準備した教材が使えなくなったり、子どもから「分からない」という嘆きが出てきたりした時に、どのように対処すればよいのだろうか。

授業における意思決定の妥当性を高めていくためには、それに関する省察が不可欠である。そのための手法には、様々なものがあるが、1つの授業を取り上げ、そこにおける

意思決定の妥当性について教師間で批評し合う授業研究は、多様な代替案が出てくる、それらを構造化できるという点で、つまり臨床性を尊重した研究的活動であるという意味で、他の研修方法にはない可能性を有している。

### （３）孤立に陥りがちである

教育の目標は多岐にわたるので、いかなる授業も完璧たりえない。どのようなものであっても、非難の対象になりうる。それゆえ、教師たちの胸の内に、授業について他人に語りたくない、その様子を誰にも見せたくないという気持ちが湧くのも、無理からぬことである。そして、教室空間が物理的に閉じられていることが、それに拍車をかける。つまり、教師の仕事は、何重にも及んで、孤立しやすいという性格を帯びている。

しかし、だからこそ、教師たちは、同僚と授業づくりの痛みや苦しみを分かち合い、その課題を解決するための術を共同で考案する機会を積極的に確保する必要があるだろう。それが、校内研修の支柱としての授業研究のさらなる意義だ。

もちろん、授業づくりに関する、教師同士のコミュニケーションやコラボレーションは、自然に、また日常的に発生することが望まれる。けれども、いわゆる多忙化や外部からのクレームに彼らが喘いでいる状況あつては、意図的・組織的に、授業研究の機会を設定する必要があるのだ。<sup>(3)</sup>

### 3. 時代の要請に応えるために

ところで、子どもに培う能力・資質、それを実現するための授業スタイルには、普遍的な側面と時代に固有なものがある。後者は、参照しうる理論・モデルや事例が少ない、その重要性が社会的要請によって急激に浮上るといった事情から、教師たちにとって、焦眉の課題となりやすい。

授業研究は、それに応ずるための機会としても、意義深い。実際、例えば、新教育課程

の全面実施に向けて、今、学校現場では、そこで強調された、各教科の指導における言語活動の充実、思考力・判断力・表現力の育成、ICT活用等をテーマに据えた授業研究の熱が高まっている。

さらに、現在、社会的に注目されている、子どもたちの学力向上については、筆者は、「学校を基盤とする学力向上アプローチ」の重要性を説いているが、その成立と発展には、授業研究が大きく貢献する。<sup>(4)</sup>

学力向上に資する多様な取り組みの中で、我がクラスでは、我が校では何を優先すべきか。それを、それぞれの教師、学校は、しっかり吟味しなければならない。それには、学力向上に関する理論の会得や学力調査の結果の読解に加えて、学力向上のアイデアを授業に具体化し、それを同僚間で批評し合うという場面が不可欠であろう。学力向上を目指した授業研究の実施、その蓄積を通じて、各人が有する経験、アイデア、スキルを持ち寄り、共有することが望まれるのだ。換言すれば、学力向上の営みの進展は、教師間のコミュニケーションやコラボレーションの成熟の過程であり、その駆動力が授業研究なのである。

#### 4. 語りと探究のコミュニティを創る

要するに、校内研修の支柱としての授業研究は、教師としての自己の発見と再発見の機会であり、仲間との絆を深めるための仕組みであり、社会的要請に応えるためのシステムである。そして、いずれにしても、こうした類の授業研究では、同僚との「語りや探究」という基本的性格が尊重されねばならない。それは、どのようにして満たされるのであろうか。

##### (1) 参加型の授業研究

少し前までは、「授業研究会におけるディスカッションが盛んでない」と嘆く教師たちの声をよく耳にした。幸い、ここ数年、この問題の克服を願い、研究授業後の協議会に、い

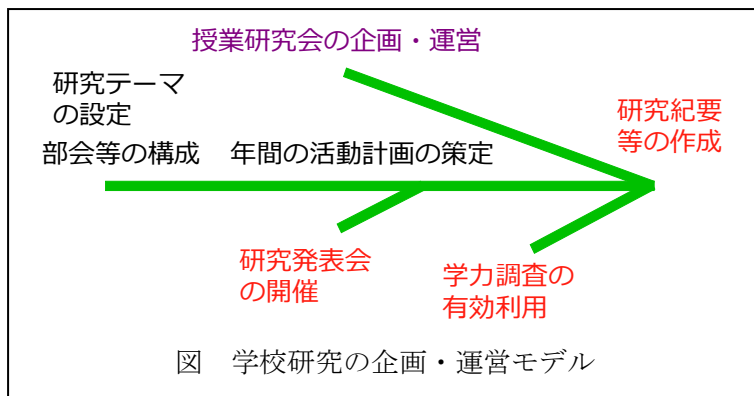
わゆる「ワークショップ」を、つまり能動的な活動を導入し、教師たちが積極的に意見を交換する場面を構成する営みが普及しつつある。(5)

授業研究において「語りと探究」が保障されるためには、授業をめぐる協議が活発に、また多面的に繰り広げられる必要がある。それは、授業者をいたずらに非難するだけの質疑応答とか、だらだらと続く指導助言から成る授業研究会では実現しない。参加者間で授業についての知識・技術・信念を積極的に共有するような仕掛け、環境、手続きを備えた授業研究会の成立が切望されよう。こうした潮流の下、写真のように、能動的な活動を事後協議会に取り入れた授業研究を重視し、実践する学校が増えている。



## (2) 授業研究を連続・発展させる装置

さらに、筆者は、前述したような授業研究の工夫改善は、それ単独では限界を有しており、学校における実践研究（学校研究）の他の営みに支えられて、その可能性を最大限に



引き出せると考える。それは、図のような「学校研究の企画・運営モデル」の下部等に位置する「装置」である。すなわち、「実践ポートフォリオとしての研究紀要の作成と活用」「授業やカリキュラムに関する外部評価たる研究発表会の開催」「エビデンスの尊重－学力調査や教育力調査の活用」である。換言すれば、これらと授業研究の連動が、我が国の学校研究の一環としての授業研究の特色であり、独自性である。これらの意義や可能性についても、ぜひご検討いただきたい。

## 注

(1) 筆者は、拙著『授業研究と教師の成長』（日本文教出版、2004年）において、授業研究の分類を試みる中で、その今日的意義たる、教師たちの授業力量形成への貢献、その重要性を指摘している。

(2) 拙著『教師が磨き合う学校研究』（ぎょうせい、2006年）の第1部「学校研究の可能性」において、明治期から今日に至る学校研究の歴史を概説している。授業研究の歴史についても言及しているので、参照されたい。

(3) 授業研究を通じた同僚性の充実の過程が記されている実践記録として、伊藤功一『校内研修』（国土社、1990年）、佐藤学監修・大瀬敏昭他著『学校を創る』（小学館、2000年）などがある。

(4) 田中博之・木原俊行・大野裕己（監）『総合教育力の向上が子どもの学力を伸ばす』（ベネッセ教育総研、2005年）に詳しい。

(5) 木原俊行「研究授業の実施と結果の活用」木原俊行編『[学習指導・評価] 実践チェックリスト』(教育開発研究所, 2004 年)や村川雅弘編『授業にいかす教師がいきる ワークショップ型研修のすすめ』(ぎょうせい, 2005 年)を参考にしていきたい。

## 要約

「校内研修の支柱としての授業研究」は、教職の特性からしても、また時代の要請に応えるためにも、教師たちにとって、極めて重要な取り組みである。その可能性を大きくするための授業研究の方法論を論ずる。